

原発性硬化性胆管炎 (PSC) に潰瘍性大腸炎 (UC) を合併した 2 症例を経験したので報告する。

症例 1 は 38 歳男性で、自覚症状はない。入院時肝胆道系酵素の著明な上昇を認めた。ERCP で肝内外型 PSC と診断した。肝生検で PSC Stage 1~2 であった。注腸造影・大腸内視鏡検査で全大腸炎型 UC の所見であった。

症例 2 は 21 歳男性で、時々下痢を認めた以外症状はない。入院時軽度の肝胆道系酵素上昇を認めた。ERCP で肝内外型 PSC と診断し、肝生検で PSC Stage 1, 注腸造影・大腸内視鏡検査で全大腸炎型 UC と診断した。PSC の症例では臨床症状に乏しくても大腸検査を行うべきであると考えられる。

LST の内視鏡的切除の適応について

(浦和市長立病院内科, *同外科)

畔田浩一・佐々木宏晃・内田耕司・
辻 忠男・田宮 誠・高橋哲也*・
山藤和夫*・戸倉康之*

LST に対し過去 3 年に当院で施行した内視鏡的切除例 32 症例 36 症変, 外科的切除例 11 症例, 計 43 症例 47 病変を対象に内視鏡的切除の適応について検討した。LST は工藤らの分類に準じて検討した。顆粒均一型が 31.9%, 顆粒結節型が 19.1%, flat elevated type が 48.9% であった。顆粒均一型は SM 癌の比率が非常に少ないことから積極的な EMR の適応と考えた。顆粒結節型, flat elevated type では non lifting sign がなく 25mm 以下を EMR の適応と考えた。なお, 今回の検討では pseudo depressed type は認めなかったが, 20mm 以上では約 50% に SM 癌を認めるといわれ, EMR の適応は慎重に対処すべきと考えた。

大腸良性リンパ濾胞性ポリープの 1 例

(八王子消化器病院, *東京女子医大第二病理)

加藤博士・野沢秀樹・宮園裕子・
武雄康悦・木村政人・梁取絵美子・
鈴木修司・前村 達・今里雅之・
田中精一・鈴木 衛・林 恒男・
羽生富士夫・笠島 武*

症例は 79 歳男性。1998 年 10 月, 肛門部違和感のため大腸内視鏡検査を行ったところ, 直腸 Ra および Rb に 2 個の山田 I 型の粘膜下腫瘍様隆起性病変を認めた。大きさはともに 7mm 大で, 表面平滑, 弾性硬, 色は周囲粘膜と同等であった。これらに対し内視鏡的ポリペクトミーを施行した。切除標本では, 粘膜下を中心に胚中心を有するリンパ濾胞の過形成を認めた。リ

ンパ球の異型や免疫組織化学的染色での monoclonality はみられず, 良性リンパ濾胞性ポリープ (rectal tonsil) と診断した。rectal tonsil は本邦では文献報告例が少なく, 比較的稀な疾患である。若干の文献的考察を加え報告する。

潰瘍性大腸炎経過中に生じた若年性大腸癌の 1 切除例

(植竹病院)

富岡寛行・渡邊和義・
久保英三・末永洋右

患者は 26 歳女性。9 歳時全大腸炎型潰瘍性大腸炎と診断され, 16 歳まで頻回再燃を繰り返していた。その後今回入院に至るまではサラゾピリン内服とステロイド注腸で長期緩解が得られていた。入院までのステロイド総用量は 51,000 mg であった。今回腹痛・腹満感を自覚し精査を施行したところ, 多発大腸癌および骨盤内腫瘍, 腹膜播種性転移による麻痺性腸閉塞の診断で手術を施行した。術中所見では腹膜播種および両側卵巢転移を認め, 大腸亜全摘, 回腸囊直腸吻合術, 子宮および両側卵巢切除術を施行した。術後 5 カ月担癌生存中である。

報告例では潰瘍性大腸炎の大腸癌合併率は特に 10 年以上経過した全大腸炎型では 6.48% と高率に認められており, 本症例のような若年発症・長期経過例に対して, 定期的な surveillance が必要であると考えられた。

腸閉塞症状を呈した小腸腫瘍の 2 例

(森下記念病院外科)

中上哲雄・武市智志・山田葉子・
西山隆明・渡辺龍彦・森下 薫

小腸腫瘍は消化管腫瘍の中でも比較的稀な疾患である。今回腸閉塞症状を呈した小腸腫瘍の 2 例を経験したので報告する。

症例 1 は 53 歳女性, 腹痛を主訴に来院した。腸閉塞の診断で減圧チューブを挿入する。小腸造影, 各種画像診断で小腸腫瘍による腸重積と診断され, 回腸部分切除術を施行した。組織学的診断は小腸脂肪腫であった。

症例 2 は 43 歳女性, 腹痛, 嘔吐を主訴に紹介入院した。既往歴に飛行機事故による下半身不随がある。腸閉塞の診断で減圧チューブを挿入する。小腸造影, 腹部 US で小腸腫瘍が認められ回腸部分切除術を施行した。組織学的診断は inflammatory fibroid polyp (ifp) であった。

ifp は機械的刺激や細菌代謝性の要因による何らか